

**[D年] 公現後第5主日(2024年2月4日)**

**【旧約聖書日課】 ヨブ記 23章1～10節**

- 1 ヨブは答えた。
- 2 今日、わたしは苦しみ嘆き  
呻きのために、わたしの手は重い。
- 3 どうしたら、その方を見いだせるのか。  
おられるところに行けるのか。
- 4 その方にわたしの訴えを差し出し  
思う存分わたしの言い分を述べたいのに。
- 5 答えてくださるなら、それを悟り  
話しかけてくださるなら、理解しよう。
- 6 その方は強い力を振るって  
わたしと争われるだろうか。  
いや、わたしを顧みてくださるだろう。
- 7 そうすれば、わたしは神の前に正しいとされ  
わたしの訴えはどこしえに解決できるだろう。
- 8 だが、東に行ってもその方はおられず  
西に行っても見定められない。
- 9 北にひそんでおられて、とらえることはできず  
南に身を覆っておられて、見いだせない。
- 10 しかし、神はわたしの歩む道を  
知っておられるはずだ。  
わたしを試してくだされば  
金のようにあることが分かるはずだ。

**【使徒書日課】 ヤコブの手紙 1章2～5節**

2わたしの兄弟たち、いろいろな試練に出会う  
ときは、この上ない喜びと思いなさい。3信仰が  
試されることで忍耐が生じると、あなたがたは  
知っています。4あくまでも忍耐しなさい。そう  
すれば、完全に申し分なく、何一つ欠けたところ  
のない人になります。5あなたがたの中で知恵  
の欠けている人がいれば、だれにでも惜しみなく  
とがめだてしないでお与えになる神に願いな  
さい。そうすれば、与えられます。

**【福音書日課】**

**ヨハネによる福音書 5章1～18節**

1その後、ユダヤ人の祭りがあったので、イエ  
スはエルサレムに上られた。2エルサレムには羊  
の門の傍らに、ヘブライ語で「ベトザタ」と呼

ばれる池があり、そこには五つの回廊があった。  
3この回廊には、病気の人、目の見えない人、足  
の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢横  
たわっていた。4 さて、そこに三十八年も病  
気で苦しんでいる人がいた。6 イエスは、その人  
が横たわっているのを見、また、もう長い間病  
気であるのを知って、「良くなりたいか」と言  
われた。7 病人は答えた。「主よ、水が動くとき、  
わたしを池の中に入れてくれる人がいないので  
す。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降り  
て行くのです。」8 イエスは言われた。「起き上  
がりなさい。床を担いで歩きなさい。」9 すると、  
その人はすぐに良くなって、床を担いで歩きだ  
した。

その日は安息日であった。10そこで、ユダヤ人  
たちは病気をいやしていただいた人に言った。  
「今日は安息日だ。だから床を担ぐことは、律  
法で許されていない。」11しかし、その人は、「わ  
たしをいやして下さった方が、『床を担いで  
歩きなさい』と言われたのです」と答えた。12彼  
らは、「お前に『床を担いで歩きなさい』と言  
ったのはだれだ」と尋ねた。13しかし、病気をい  
やしていただいた人は、それがだれであるか知  
らなかった。イエスは、群衆がそこにいる間に、  
立ち去られたからである。14その後、イエスは、  
神殿の境内でこの人に出会って言われた。「あ  
なたは良くなったのだ。もう、罪を犯してはい  
けない。さもないと、もっと悪いことが起こる  
かもしれない。」15この人は立ち去って、自分を  
いやしたのはイエスだと、ユダヤ人たちに知ら  
せた。16そのために、ユダヤ人たちはイエスを迫  
害し始めた。イエスが、安息日にこのようなこ  
とをしておられたからである。17イエスはお答  
えになった。「わたしの父は今もお働いてお  
られる。だから、わたしも働くのだ。」18このた  
めに、ユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そ  
うとねらうようになった。イエスが安息日を破  
るだけでなく、神を御自分の父と呼んで、御自  
身を神と等しい者とされたからである。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## ヨブ記 23章1～10節

- 1 ヨブは答えた。
- 2 今日もまた、私の不平は激しく  
私の手は呻きのゆえに重い。
- 3 私は知りたい。  
どうしたら、私はその方に会えるのか。  
御座にまで行けるのか。
- 4 私は御前で訴えを並べ  
口を極めて抗議したい。
- 5 私はその方の答えを知り  
私に言われることを悟りたい。
- 6 その方は強大な力を発揮して  
私と論争するだろうか。  
いや、きっと私を心に留めてくださるだろう。
- 7 そこでは、正しい人がその方と論じることができ  
私は永遠に裁きから解放される。
- 8 しかし、私が東に進んでも、その方はおらず  
西に行っても、認めることはない。
- 9 北でその方が事をなしても、私には見えず  
南で向きを変えても、見ることはできない。
- 10 しかし、神は私と共にある道を知っている。  
その方が私を試せば、私は金のように価値を現す。

## ヤコブの手紙 1章2～5節

- 1 神と主イエス・キリストの僕ヤコブが、離散し  
ている十二部族に挨拶いたします。
- 2 私のきょうだいたち、さまざまな試練に遭った  
ときは、この上ない喜びと思いなさい。3 信仰が試  
されると忍耐が生まれることを、あなたがたは知  
っています。4 あくまでも忍耐しなさい。そうすれ  
ば、何一つ欠けたところのない、完全に申し分の  
ない人になります。5 あなたがたの中で知恵に欠け  
ている人があれば、神に求めなさい。そうすれば、  
与えられます。神は、とがめもせず惜しみなくす  
べての人に与えてくださる方です。

## ヨハネによる福音書 5章1～18節

- 1 その後、ユダヤ人の祭りがあったので、イエス  
はエルサレムに上られた。2 エルサレムには羊の門  
のそばに、ヘブライ語で「ベトザタ」と呼ばれる

池があり、そこには五つの回廊があった。3 その回  
廊には、病気の人、目の見えない人、足の不自由  
な人、体の麻痺した人などが、大勢横たわってい  
た。4 彼らは、水が動くのを待っていた。あ  
る時間になると、主の天使が池に降りて来て水を  
動かしたので、水が動いたとき、真っ先に入る者  
は、どんな病気にかかっているか、良くなったか  
らである。5 さて、そこに三十八年も病気で苦し  
んでいる人がいた。6 イエスは、その人が横たわっ  
ているのを見、また、もう長い間病気であることを  
知って、「良くなりたか」と言われた。7 病人は  
答えた。「主よ、水が動くとき、私を池の中に入  
れてくれる人がいません。私が行く間に、ほかの  
人が先に降りてしまうのです。」8 イエスは言われ  
た。「起きて、床を担いで歩きなさい。」9 すると、  
その人はすぐに良くなって、床を担いで歩きだし  
た。

その日は安息日であった。10 そこで、ユダヤ人た  
ちは病気を癒していただいた人に言った。「今日  
は安息日だ。床を担ぐことは許されていない。」  
11 しかし、その人は、「私を治してくださった方が、  
『床を担いで歩きなさい』と言われたのです」と  
答えた。12 彼らは、「お前に『床を担いで歩きな  
さい』と言ったのは誰だ」と尋ねた。13 しかし、病氣  
を治していただいた人は、それがだれであるか知  
らなかった。群衆がその場にいたので、イエスは  
そっと立ち去られたからである。14 その後、イエス  
は、神殿の境内でこの人に出会って言われた。「あ  
なたは良くなったのだ。もう罪を犯してはいけな  
い。さもないと、もっと悪いことが起こるかもし  
れない。」15 この人は立ち去って、自分を治したの  
はイエスだと、ユダヤ人たちに知らせた。16 そのた  
め、ユダヤ人たちはイエスを迫害し始めた。イエ  
スが安息日にこのようなことをしておられたから  
である。17 イエスはお答えになった。「私の父は今  
もなお働いておられる。だから、私も働くのだ。」  
18 このために、ユダヤ人たちは、ますますイエスを  
殺そうと付け狙うようになった。イエスが安息日  
を破るだけでなく、神を自分の父であると言い、  
自分を神と等しい者とされたからである。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・2月4日「公現後第5主日」の日課主題は「いやすキリスト」。

・旧約聖書日課は、「ヨブ記」から、友人たちとの三巡目の対話の最初、エリファズの言葉に対してヨブが答えた発言箇所の一部。使徒書日課は、「ヤコブの手紙」から、冒頭の勧告箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「ベトザタの池の出来事」の箇所。

**旧約日課(ヨブ 23章より)**

・「ヨブ記」については、前回資料「聖書と祈りの会 240124」を参照。

・日課箇所は、前回日課箇所に続く箇所。ヨブと三人の友人たちとの対話三巡目、エリファズの発言に対するヨブの応答として展開されており、ヨブの発言は24章末まで続く。エリファズら友人たちの説得は、基本的に、現世的な因果応報を土台とした正論の信仰観に基づいている。ヨブが自らの正しさを訴えることに対しても、彼らは、ヨブが知らずに犯してきた罪を認めるべきと説得する。それに対して、日課箇所のヨブの応答は、自らの正しさを訴える者に神はなぜ明白に伝えてくださらないのかと問うものとなっている。さらに日課箇所に続く発言(～24章)で、ヨブは、正しく誠実な生き方をしてきた者に神が応えてくださっていないと、因果応報の正論に疑問を呈し、現実社会における不条理をこれでもかというほど羅列した上で、それでも強欲で不誠実な者たちは最後に滅ぼされるだろうという正論がまったく現実から乖離していることを訴えている。

・4節「訴え」は、ヘブライ語「ミシュパト」で、22:4「裁き」と同じ語。「ミシュパト」は、「裁き」を原義とする語であるが、「公正／法／言い分／正当」などとも訳され、「ヨブ記」中で23例がみられる。「出エジプト記」の「シナイ契約伝承」(19～24章)中で「十戒」と並んで提示されるいわゆる「契約の書」は、「ミシュパト」として諸々の法的規定が提示されており(出 21:1)、正典「律法」で通常「法」と扱われる諸々の規定を意味する主要な用語となっている。「ヨブ記」が、正典「律法」で扱われる専門用語としての「ミシュパト」を前提にこの語を用いているのか、それとも、より一般的な用語として用いているのかは定かではない。しかしながら、本書の構成(ヨブと友人らの対論、四人目の友人の勧告、神の宣告)は、「法廷における討論と審判」を模したものと考えられている。

・7節「正しい」は、ヘブライ語「ヤーシャール」で、「ヨブ記」では、冒頭の説話伝承中で「ヨブ」の性質を表す語として用いられ(1:1,8、2:3)、3章以下の対話物語中でも、ヨブと友人らの中で議論となるヨブの「正しさ」に関連して用いられる(4:7、8:6、17:8、33:27)。旧約中では、「申命記」や「列王記」、「詩編」、「箴言」、また「エレミヤ書」および「ミカ書」での用例が目立つ。

**使徒書日課(ヤコブ1章)**

・「ヤコブの手紙」は、「公同書簡」に区分される書簡文書の一つ。書簡様式に従って差出人名は「ヤコブ」と明記されるが、宛先は「離散している十二部族の人たち」とあり、通説では、不特定の諸教会共同体に宛てた公開説教と解されている。書簡様式に則った末尾挨拶は欠けている。

・差出人「ヤコブ」については、「神と主イエス・キリストの僕」という属性が記されるのみで、初代教会時代に複数いたことが確実な「ヤコブ」のうちの誰であるかを特定できる情報はないが、教会伝承では、「主の兄弟ヤコブ」(ガラ 1:19)とみなされてきた。「主の兄弟ヤコブ」は、使徒パウロが書簡で言及しているほかは、「福音書」で主イエスの兄弟たちの名として挙げられている(マタイ 13:55 など)。また、「使徒言行録」は、「イエスの兄弟たち」(使徒 1:14)が主イエス昇天時の弟子たちの集団に加わっていたことを伝えているほか、「使徒ヤコブ」死後(使徒 12:2)のエルサレム教会で指導的立場にある「ヤコブ」を登場させており(同 15:13、21:18)、この「ヤコブ」が、パウロの言及するエルサレムで「柱と目される」(ガラ 2:9)三人のうち一人に数えられる「主の兄弟ヤコブ」と考えられてきた。おそらく、「エルサレムの教会共同体」で、使徒たちが各地に離散していった際、最後に残っていた指導者「使徒ヤコブ」が死んだ後、「主の兄弟ヤコブ」が指導的地位を継承したのだろう。「エルサレムの教会共同体」は、初期には「ギリシア語を話すユダヤ人」すなわちディアスポラ系ユダヤ人も加わった複合的な集団となりながら、その後は、後から加わった者たちを中心にエルサレムを離れてそれぞれの生活拠点で「教会共同体」を形成・発展する方向にかじを切り、それらの諸教会を使徒らが巡回して指導する体制になった一方、「エルサレムの教会共同体」はガリラヤで主イエスと活動を共にしてきた初期メンバーを中心とする集団になったと考えられる。そのメンバーの多くは、主イエスの家族とも親密な関係を持ってきた者たちであったため、主イエスの弟である「ヤコブ」が指導者の立場になるのは、自然なことであったと推認される。

・本書簡の主張は、主イエスの「山上の説教」(マタイ 5～7章)にも似て「律法」の定める倫理実践を強調することにある一方で、パウロが主張するような「信仰」の第一義的な意義を必ずしも認めていない、と評されてきた。たしかに、本書簡は、「人は行いによって義とされるのであって、信仰だけによるものではありません」(ヤコブ 2:24)などの言説は、パウロの信仰義認論と矛盾する言説とみなされてきた。しかし、このような評価は、両者が「信仰」や「義」などの用語を同じ意味(定義)で用いているとみなすことによる誤解であろう。端的に、両者とも「信仰」を出発点とした「行い(実践)」を目標とすべきことを説いており、それゆえに、本書簡でも日課箇所である冒頭では、まず「信仰」の揺るがないことが前提として勧告されているのである。

**福音書日課(ヨハネ 5 章より)**

・日課箇所は、「ベトザタの池の病者治癒伝承」の逸話箇所、「ヨハネ福音書」だけが伝えている逸話。本福音書の構成枠組みとして用いられている「祭り」の区分では、「ユダヤ人の祭り」(5:1)と場面設定される5章全体が、この逸話から展開したものとまとめられている。5章全体は、1~9節「病者治癒の逸話」、9節後半~17節「治癒逸話の後日譚」、18~47節「敵対する者たちに向けた主イエスの主張」、という構成になっている。おそらく、19節以下は、主イエスを一人称として語られた「ヨハネ教会共同体」の(指導者の)説教と考えられる。

・場面設定となっている「ユダヤ人の祭り」は、現在知られている「祭り」のいずれを指しているのか分からない。病者について「三十八年も病気で苦しんでいる人」と言われており、「モーセ物語」においてモーセ率いる民が最初のカナン入植を断念した後に過ごした期間を「三十八年」と表現する例があり(申 2:14)、「モーセ物語」の故事に由来する祭りのうち本福音書中で明示されない「七週祭」を示唆しているかもしれない。

・1~9節の治癒逸話は、共観福音書にも見られるさまざまな病気治癒伝承と大きな違いは認められない。殊に、「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」という主イエスの宣言のみによって病者が立ち上がり、「床を担いで歩きだした」という描写は、共観福音書が「中風の人の治癒」として伝えている逸話(マタイ 9:1~8、マルコ 2:1~12、ルカ 5:17~26)と酷似している。両方の逸話が同じ伝承に遡るとは考え難いが、主イエスの治癒逸話伝承として共通した型にはめられて伝えられたものと考えられる。

・「ベトザタの池」は、考古学研究によって、エルサレム城外に前8世紀ごろに建設された二面の人口貯水池であったと考えられている。口語訳聖書では「ベテスタ」の訳語が充てられている。

・9節後半~17節の後日譚は、治癒譚を「安息日論争」と結びつけている。「安息日論争」は、共観福音書でも、主イエスと対立するファリサイ派らとの間での主要な論点の一つであったことが伝えられている。日課箇所も、この問題がユダヤ人たちの主イエスに対する迫害のきっかけであったと示している(16節)。ところが、この後日譚は、ユダヤ人たちが問題とした別の論点をここに持ち込んでいる。それは、「病者を癒した者は、何者なのか」という論点で、はじめに「病者を癒したのは誰か」という形で導入しながら、最後には、「病者を癒したイエスとは、何者なのか」という論点に移行させている。「安息日論争」に対する主イエスの応答は17節で完結しており、18節のまとめ句によって、この第二の論点を明示する構成になっている。

**来週の誕生日 (2月4日~10日)**

**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-207 番「ほめよ主を」は、1960~70年代の礼拝改革運動の流れの中で英国教会司祭パワーズが作詞。曲は、20世紀米国の代表的な教会音楽家 R.W. ダークセンの作曲。
- ・21-486 番「飢えている人と」は、1977年、ドイツの牧師 F.K.バルトの作詞、カトリックの音楽家 P.ヤンセンの作曲で創作された讃美歌。
- ・21-467 番「われらを導く」(Ⅱ22「みちからあふるる」歌詞)は、18世紀英国のメソジスト牧師ウィリアムズ作のウェールズ語讃美歌が原作で、英語版ほか各国語訳で歌われてきた。曲は19世紀ウェールズの教会音楽家ヒューズの作。

**21-207「ほめよ主を」****We the Lord's People**

1. We the Lord's people, / heart and voice uniting, / praise him who called us out of sin and darkness / into his own light, that he might anoint us / a royal priesthood.
2. This is the Lord's house, / home of all his people, / school for the faithful, / refuge for the sinner, / rest for the pilgrim, haven for the weary; / all find a welcome.
3. This is the Lord's day, / day of God's own making, / day of creation, day of resurrection, / day of the Spirit, sign of heaven's banquet, / day for rejoicing.
4. In the Lord's service / bread and wine are offered, / that Christ may take them, / bless them, break and give them / to all his people, his own life imparting, / food everlasting.

**21-486「飢えている人と」****Brich mit den Hungrigen dein Brot**

1. Brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Traurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus.
2. Such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Traurigen ein Lied.
3. Teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort.
4. Sing mit den Traurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot.
5. Sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Traurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel.

**21-467「われらを導く」****Guide Me, O Thou Great Redeemer**

1. Guide me ever, great Redeemer, / Pilgrim through this barren land. / I am weak, but you are mighty; / Hold me with your pow'ful hand. / Bread of heaven, bread of heaven, / Feed me now and evermore: / Feed me now and evermore.
2. Open now the crystal fountain / Where the healing waters flow; / Let the fire and cloudy pillar / Lead me all my journey through. / Strong deliv'rer, strong deliv'rer, / Shield me with your mighty arm; / Shield me with your mighty arm.
3. When I tread the verge of Jordan, / Bid my anxious fears subside; / Death of death and hell's destruction, / Land me safe on Canaan's side. / Songs and praises, songs and praises / I will raise forevermore; / I will raise forevermore.